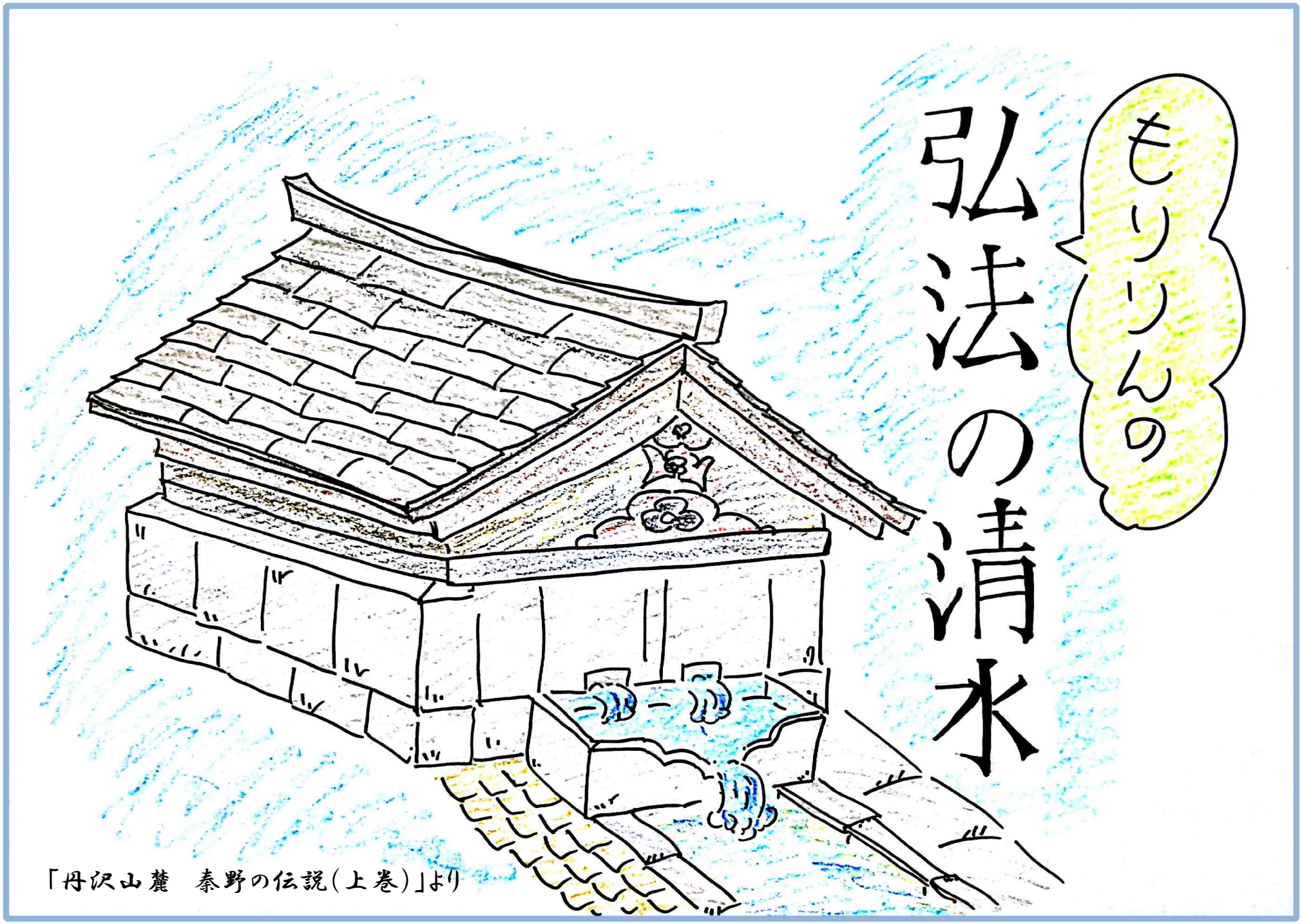


「丹沢山麓　秦野の伝説（上巻）」より

むかし、むかし。じりじりと照りつける夏の日に、一人の旅のお坊さん、弘法大師が歩いていました。

草をわけ、坂をのぼり、いくたびか野ばらに袖を引きとめられ、里の小道に出たときには、のどがひりひりと、かわきあがっていました。

「ああ、水がほしい。どこかにないかなぁ。」と思いながら、水の流れを探しましたが、それらしいものはどこにもありません。

しかたなく、人家を探して水をいただくことにしました。

やっとのこと、一軒の農家を見つけました。

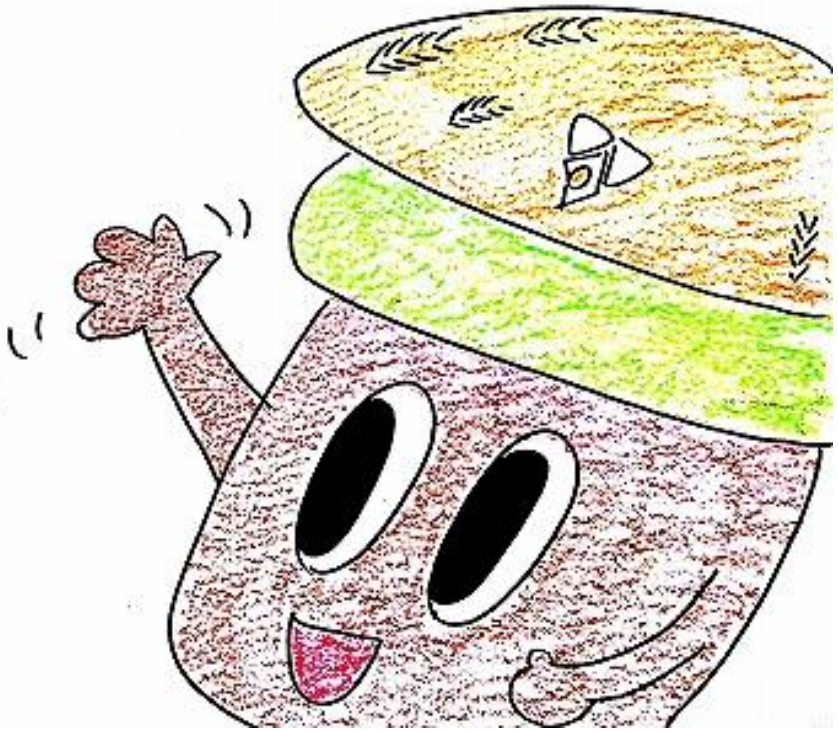
「わしに水を一杯めぐんではくれまいか。わしののどは、ひりひりするほどにかわきあがってしまったのじゃ。」とていねいに頼みました。

すると、「はい、はい、わかりました。わかりました。」と優しい娘さんの声がかえってきました。

しかし、勝手口の水がめの中をのぞいた娘さんは、顔色をさっと変え、一段落とした声で、

「あいにく水をきらせてしまいました。今すぐ汲んできますから、しばらくお待ちになってくださいませ。」と言いながら、手桶をさげて足早に外に出ていきました。

弘法さまは、今さらながら娘さんの親切さを心から感謝せずにはいられませんでした。



元気よく出かけて行った娘さんは、どこまで行ったのでしょうか。いつまでたっても姿が見えないのです。

弘法さまは、わびしく思い、いまかいまかと待っていました。

すると、はるかむこうの林のかげから、娘さんが手桶を重たそうにさげてやってくるのが見えました。

弘法さまは、娘さんのところにかけて行き、

「どうも、どうもありがとう。ありがとう。」

と繰り返し、深々と頭をさげました。

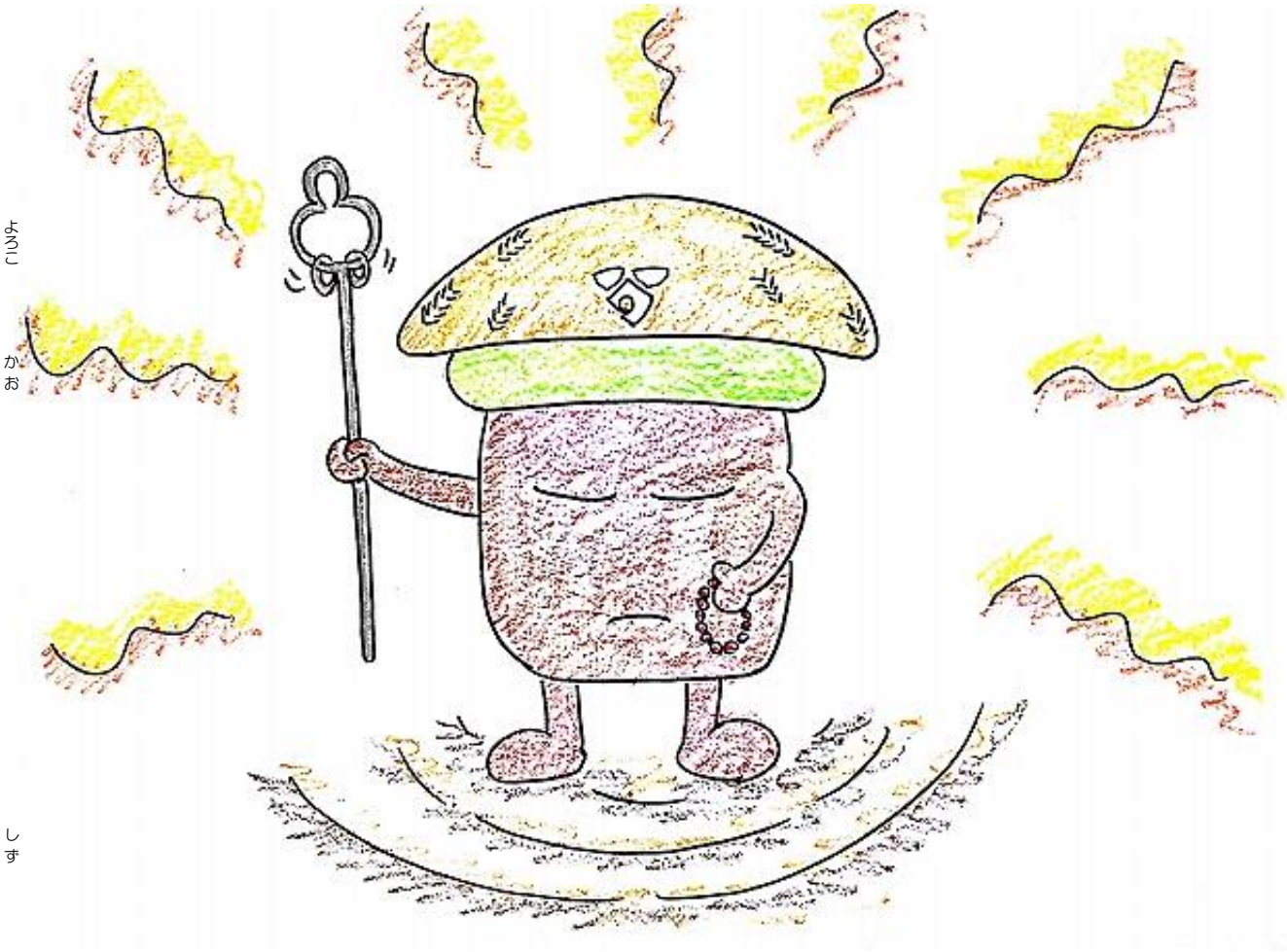
娘さんは、額の汗をぬぐおうともせず、ひしゃくに水を入れて差し出しました。

弘法さまは、その親切に感謝しながらのどをうるおし、ほっと一息つかれました。

親切な娘さんは、弘法さまの喜びに満ちた顔を見つめながら、

「この里は水が少ないので、みんな困っているのです。ですから少しの水でも、それは、それは大切に使っているのです。」と話しました。

その話をじっと聞いていた弘法さまは、なにを思われたのか、庭の真ん中に進んでいき、右手に高く杖をかかげ、静かに目を閉じて、じっと動きません。・・・・・。時間はどんどん過ぎ去りました。



すると、やにわに喜びを顔にあらわして、ことば静かに、

「たしかに水は出る。親切にしていただいたお礼に、この近くに井戸をつくってしんぜよう。くわをもってわしと一緒にくるがよい。」と申され、娘さんの先に立って歩きはじめました。

親切で、素直な娘さんでも、弘法さまの言われた不思議な「おことば」を信じようとはしませんでした。

ただ、ただ、弘法さまの言いしれぬ不思議な動作に引きずられて、ついていったのです。

「さあ、ここを掘ってみるがよい。きっとよい水があふれ出るであろう。」と言いながら、ぐっと杖をつき立てました。

娘さんは、言われたとおり、くわをふり上げて、固い地面を「ガツン、ガツン」と掘っていきました。

突然、「うわっ。」と驚きの声が上がりました。

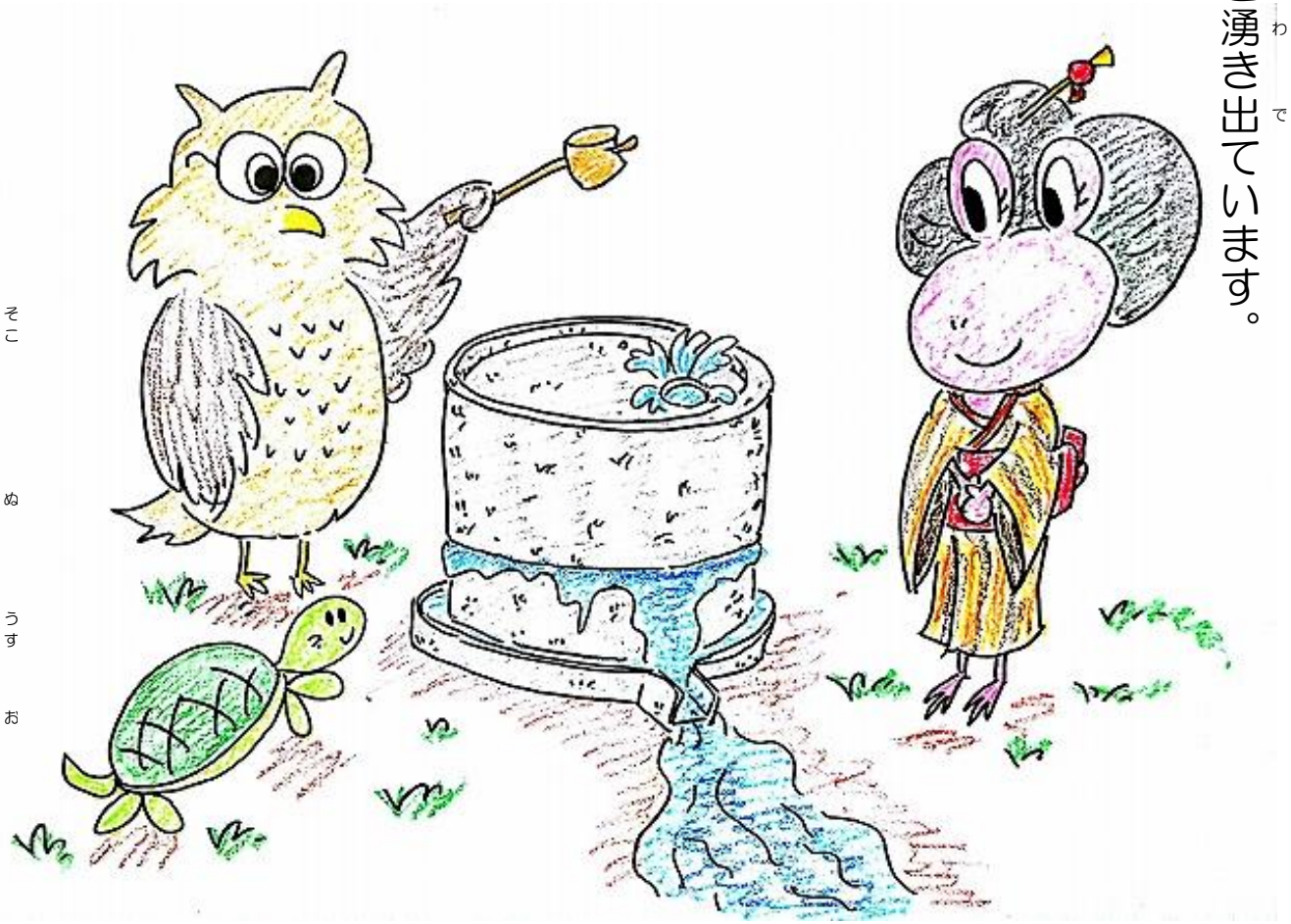
驚くのも無理はありません。

振り下ろしたくわの下から、見るからにおいしそうな、美しい清水が湧き出てきたのです。

娘さんは、あまりの喜びと驚きのため、ぼうぜんとし、次に出てくることばがありません。

弘法さまの後ろ姿が森の中にかくれて見えなくなって、初めて娘さんは、われにかえりました。

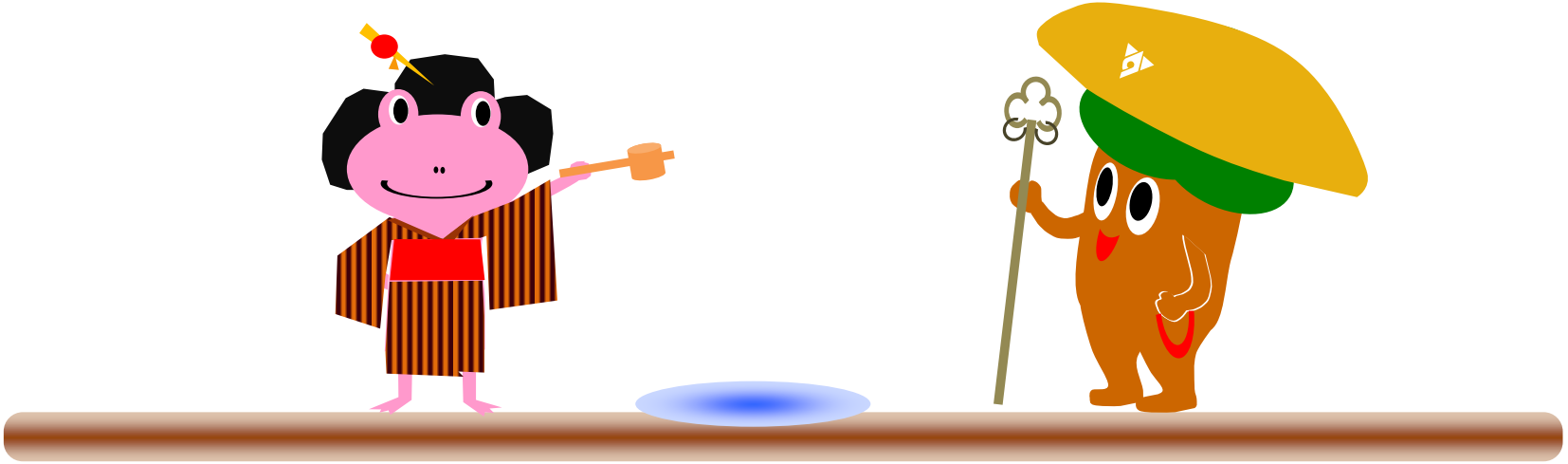
のちに、この清水は、「弘法の清水」と呼ばれ、いまだかつて、どんなに日照りが続いても水が枯れることがなく、水晶のような水がこんこんと湧き出ています。



水が湧き出したところに、底をくり抜いた臼を置いたことから、「臼井戸」とも呼ばれています。

村人たちは、「弘法さまの杖から出た水だぞ、ありがたい井戸だ。」と言って、その思いをいつまでも言い伝えてきたのです。

おしまい



もりりんの「弘法の清水」　平成２９年（２０１７年）１月

秦野市　環境産業部　環境保全課　http://www.city.hadano.kanagawa.jp/

「丹沢山麓　秦野の伝説（上巻）」より